

東日本大震災第一次派遣隊レポート

最大の敵は無関心

The worst sin toward our fellow creatures is not to hate them, but to be indifferent to them.

(George Bernard Shaw)



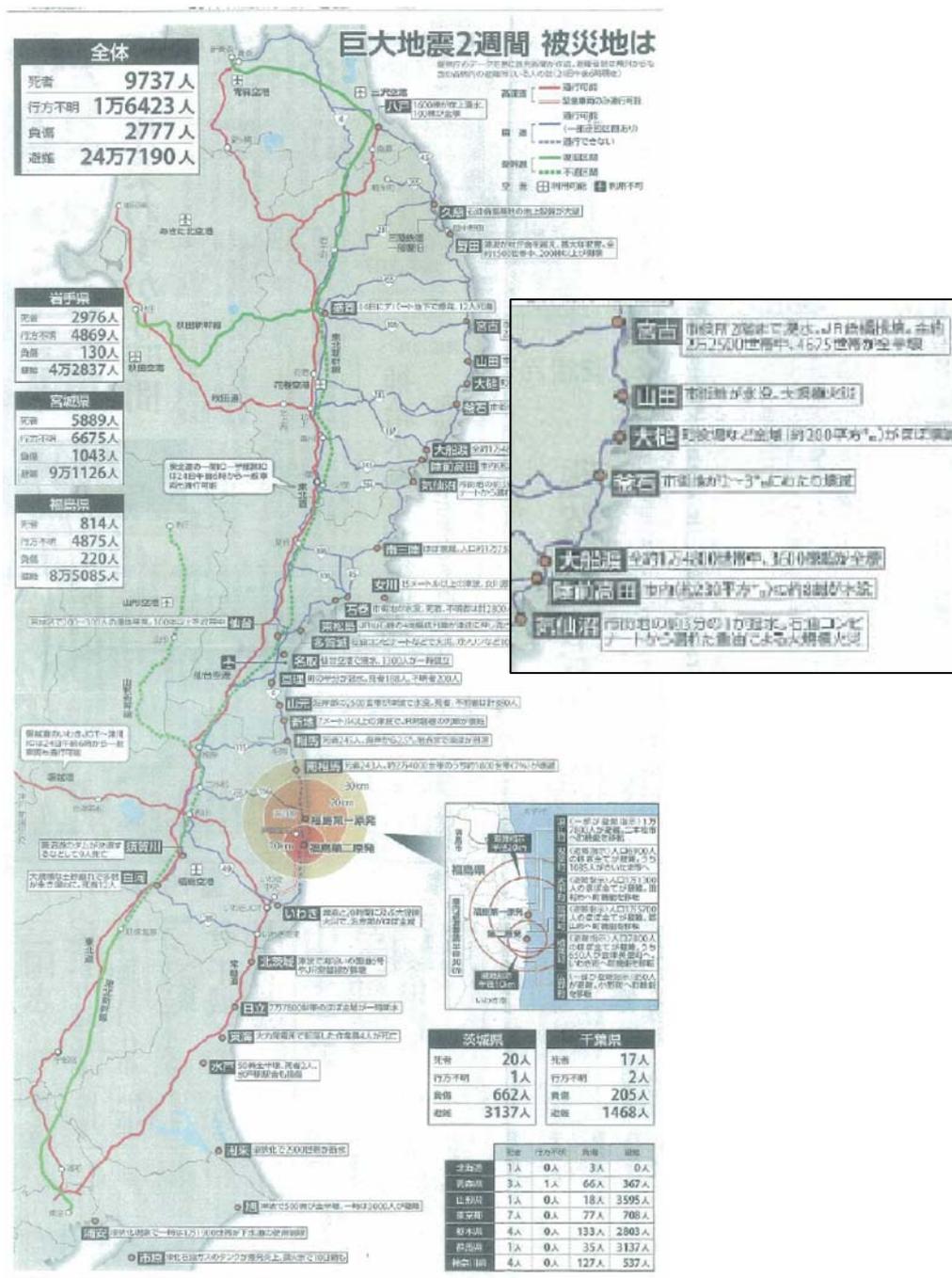
2011年3月28日

第一次派遣隊

坂本賢 中嶋優太

早川洋輔 藤田雄太

東日本大震災 2週間後の被災地状況



2011年3月25日

読売新聞より引用

災害支援チーム派遣の目的

- 岩手県薬剤師会からの要請による東日本大震災により被災した岩手県沿岸地域での薬剤供給支援活動
- 被災地ならび、被災地域近隣住民への生活援助物資の提供
- 各地から派遣される医療支援チーム、地元医療スタッフとの情報交換
- 今後の派遣活動に活用するための現地情報収集

行動期間

2011年3月19日（12：40青森県弘前市発）～25日（17：30帰着）



山田町船越地区

人的、物的支援投入量

総行動時間：1名当り約150時間

当派遣チーム（4名）：約600時間

総支援活動時間：1名当り約82時間

当派遣チーム（4名）：約328時間

総支援物資金額：1,113,744円

総走行距離：約2,200km

派遣メンバー

坂本賢（薬剤師、隊長）

中嶋優太（薬剤師）

早川洋輔（介護福祉士）

藤田雄太（人事部）



左：武政文彦氏

下：武政美紀子氏

現地サポート

武政文彦氏（薬剤師）

武政美紀子氏（薬剤師）



本災害派遣の意義要約

1000年に一度といわれる未曾有の大災害初期に間髪を入れず現地に支援チームが入り込んだことにより、現地ニーズの概要が実感を持って把握できた。また、短期間の滞在にも関わらず支援活動の課題、矛盾が見えてきたことも大きな収穫であった。特に多数の住民や医療関係者、ボランティアうまくコーディネート出来ない災害時において活動のブレーキになること、そして客観的に状況を把握できるリーダーがいないと事態の混乱に拍車をかけることを実感した。

派遣チームによる問題点の考察と提言

● 災害時初期の組織的対応

➤ 提言1：地元薬剤師は住民との対面活動を重視すべき

地元薬剤師による救護所での役割は大きい。それは住民のことをよく知っている薬剤師が活動の前面に立つことで地域住民に安心感を与えることと薬剤師とはどういうものかをアピールするためでもある。

しかし地元薬剤師自身が被災者であるケースもあるので一概には言えないが、救護所で「薬局」として割り振られた部屋や、被災を免れた薬局の調剤室に閉じこもり、住民（被災者）の中に入って活動（接触）する機会が少ない薬剤師が存在したことは残念な姿だった。

➤ 提言2：現地調整員（コーディネーター薬剤師）にもっと権限を与えよ

災害初期の混乱期に、地元で生き残った薬剤師の中心人物を現地調整員として対応していたことは適切である。

しかし、現地調整員のコーディネートに若干の疑問が残るところもあったが、円滑な活動を行うために必要なことがあると考えられた。

例えば、対策本部から「現地調整員としての決定権を与える事」「窓口は現地支部長ではなく現地調整員とするこ



山田町船越地区

と」など明確にすることで、ボランティア薬剤師の受入、サポート依頼などより正しい情報をお互い共有できると思われる。

実際、山田南小学校薬局担当者は、岩手県薬剤師会にボランティア要請

をしていたが、現地支部が断っていたようである。

あらためて、支援を遅らせないために適切な現地調整員の任命、決定権と権限譲渡をするのが望ましいと思われた。

補足

今回は岩手県薬剤師会の要請により大船渡市への支援へ向かった。しかし、岩手県薬剤師会と現地調整員との認識に隔たりがあり当初のスケジュールとは異なる独自の行動を取らざるを得なかった。

災害直後の混乱の中では、仕方ないとは思われるが、被災を免れた薬局で、「支援」を求められた仕事というのは通常の保険調剤業務だった。

この業務がしばらく続くのであれば臨時に薬剤師を雇用し対応するのが本筋ではないだろうか。

➤ **提言3：「罹災証明の速やかな発行」「医療費等の国家負担」を**

罹災者を特定し、「公的サービス」「特別融資時の証明」「生活必要物資購入時の補助」などのため罹災証明の発行は必要である。

また、災害時の医療、介護は保険医療制度とは区別して考えるべきである。罹災証明を提示された方への医療、介護サービスは当面、国家負担とすることが必須である。

● ボランティア薬剤師の仕事

被災地には、薬局薬剤師、病院薬剤師などスキルの異なる薬剤師が入り込む。

その中で大きく分けて、「避難所での薬局業務の支援」と「医療現場から被災地近隣地区の支援」があげられる。

➤ **提言4：「避難所での薬局業務の支援」は合理的に行うべきだ**

前述の通り、地元の薬局薬剤師には窓口業務（被災者の近くでの業務）である投薬業務に専念してもらいたい。

また地元の病院薬剤師は医師の問診や診察の現場に近い位置に配置し、医師や看護師、薬局と情報交換の架け橋として活躍してもらいたい。

これにより問診による服薬状況の確認、医師の診察、薬局からの疑義



照会などがスムーズかつ正確に行われると考える。

一方、支援に入ったボランティア薬剤師は、救護所内での薬剤調整から投薬前までの業務に専念する。

これにより地元薬剤師が「現場の統括」「現地調整員として業務」、地域の今後の対応に向けたミーティングに参加しやすくなり、安全かつ効率的な医療環境の構築が可能になると思われる。

➤ 提言5：「被災地近隣地区の支援」を忘れるな

「避難所で生活している方」だけが支援の対象ではない。

現場では、家屋の倒壊がなくてもライフラインが途絶えていた。自宅で生活している方々へも同様に支援は必要である。

われわれは、アフガン難民キャンプでの経験（難民キャンプ内だけに被災者がいるわけではない）をもとに行動し、独自の支援を行うことができた。

足でかせぎ、現地のニーズを把握する。

仮設診療所などが入っている大きな避難所以外に、被災地近隣地区を回ることで、生活環境や物資のニーズが異なり、それに基づいた援助、物資の提供が必要であることがわかった。



交通手段、燃料不足、情報不足などにより、医療の現場までたどり着けない被災者が多いことも判明した。

また、病院を受診する必要のない軽症例に対して、一般用医薬品、衛生用品などを提供し、開局薬剤師としてのアドバイスをおこなうことができた。

私たち、薬局薬剤師は季節の変化、環境の変化、支援体制の変化に応じた、被災地近隣地区へもきめ細かな支援、アドバイスを行うことが重要だと考えられた。

➤ 提言6：「衛生面の専門的管理体制」の立ち上げを

今回の震災は3月11日に東北地方の広範囲で発生している。そのため当初は季節に起因する衛生面での問題発生少なかったことは言うまでもない。

しかし、中長期的な支援を考えた場合、「食中毒への予防措置」「仮設ト

イレの管理」「ゴミの処理方法」などについて、専門的管理体制が求められる。予防を重点とした公衆衛生対策を行うべきである。その中でボランティア薬剤師の必要性は高く、早急に彼等を活用した夏期に向けた公衆衛生対策が必要と考えた。

- 被災時の処方せん発行、調剤

- 提言7：処方せん発行までの実務を合理化せよ

お薬手帳の利用、薬剤情報提供用紙によりスムーズに医薬品の特定は可能になっている。

しかし、緊急時に、「受付→診察→くすりの交付」の流れが必要だろうか？

また、現場で仕事に関わった際に、医師がお薬手帳、薬剤情報提供用紙に記載された薬剤をそのまま書き写すだけの仕事をしている場面にも出くわした。結果的にはそれが現在服用していない古い薬の記録であり、そのことが患者との会話によって判明し、古い情報による薬の交付（誤薬）を回避することができた。

受付後、診察が必要か？常時服用している薬が必要か？を確認の上、後者の場合には薬剤師がお薬手帳を確認し、同一処方であれば「薬剤師がカルテへ転記」→「くすりの交付」の流れでもよいと考えられる。

「医師の診断が必ず必要なのか？」「血圧の測定など簡単な検査が必要なのか？」「検査、診断の不要。くすりだけでいいのか？」「不要、不急のくすりを削除できないか？」など受付時にトリアージすることは薬剤師の仕事であると考えられた。

- 被災時の調剤は新しいスタイルで行うべきだ

この非常時に PTP シートをはさみで切り、薬袋を作成して交付する必要があるのだろうか？

パキスタン（クエッタ）で坂本が経験したことであるが、PTP 単位あるいは小包装単位で交付することで薬局業務はより効率的に行う事が可能かと考えられる。

また、製薬メーカーには緊急用パッケージの開発を求めたい。

また、被災後時間の経過と共に、仮設診療所の利用者は減少し、インフラが徐々に整備されることで医薬品の供給は安定する。

今回は3日分、7日分、10日分と小刻みに処方日数を延ばしていた。



しかし、被災者の事情を考慮した場合、供給可能な薬品は処方量を大幅に増やす事も検討できないだろうか？あとは薬局レベルにおいて分割調剤で対応すれば十分である。

しかし、これは期間を限定して行うものであるのは言うまでもない。

◇ 緊急用パッケージ

パッケージには「薬品名、基本的な用法用量、患者氏名の記載欄」が望まれる。

● ニーズの変化への対応

当然、被災地のニーズは日々変わっていく。

薬局薬剤師は、避難所へ積極的に出向き、生活上のアドバイス、ニーズの把握、情報収集に動くことが大切である。



また、長期的な支援へ移行していく場合には、必要な装備、物資、メンバーについて現地調整員と十分な協議が必要となる。

行動日誌

3月19日

本部での出発式も終えて出発。おびただしい量の荷物でしたが無事、東和町へ到着。

岩手の被害状況、ルートの確認、明日からのスケジュール(岩手県薬剤師会との今後のスケジュールなど)、県民性、などについて武政先生より説明。

また、明日は大槌町の北。山田町へ向かいながら、実際の被害状況、サポート状況、薬剤師のニーズについて調査を主体に行う予定。



20日

花巻空港近くのホテル(唯一宿泊が決まっていた)から東和町へ到着。

地元、山田町の方（岩手県東和町キクヤ薬局利用者である昆さんの友人）から依頼された物資を準備し搬入。

笛吹峠を經由し山田町へ向かう。

そこで、徒歩で移動している人たち。消防署で集まっている人たち???

何かがおかしい？気になる？

山田町到着後、現地の方から情報収集。

情報収集より

- 現地職員（菊池さん）

山田町対策本部の対応に不満

マンパワー不足？（4名の職員に対し130名の被災者）

物資の供給状況（避難所ボランティア）

- 山田町道の駅（木村さん）

底抜けに明るい。職員にいらだちなどもあり、難しい状況になっているようですが、木村さんは明るく、元気に振る舞っている。

依頼された物資をお渡しし、他に消毒用アルコール、粉ミルクなどを道の駅従業員の方にお渡しした。

- 山田町織笠小学校

聞き取り調査より、便秘、下痢などの方が多い。

東和町より積み込んだ、整腸剤と下剤を職員の方へ使用方法、生活上の注意点を説明しお渡しした。

駐車場で高齢者より湿疹について相談があり、実情を考慮し中嶋君のリンデロンVG軟膏をお渡しした。（災害時の医療用医薬品提供）

- 山田町役場

ボランティア受付窓口にて薬剤師であること明らかにしたところ、山田南小学校へ日本医師会より到着予定の医薬品（時間は未定）があり、そちらの仕分けを依頼され山田南小学校へ向かう。

- 山田南小学校

山田南小学校には救護所（診療所）が既に機能していた。

その中では、保健室が調剤室（医薬品倉庫）として機能をはじめていた。

宮古市より参加している薬剤師（高橋さん）が中心となり、国立病院機構（札幌、豊橋）、地元出身薬剤師（仙台にて薬局勤務、中嶋の大学時代後輩）、地元薬剤師（中には被災者も）など

こちらに入ったのは午後だったため、診療所は落ち着いていた。

時間に余裕があったため、数名の薬剤師で体育館、柔道場(比較的、元気な被災者が避難している)へ向かう。

被災者の方へ「薬剤師です。くすりや、健康面での不安はありませんか?」と聞き取り。



聞き取りより

- アリセプト、サアミオンは緊急性がない。と言われた大丈夫なの?
- ユベラ N を服用している。飲まないと不安!

また、柔道場に「血圧計」をスペアの電池と共に東和薬局より寄贈。

一なにかがおかしい?? = 地元の医療スタッフは??

その後、札幌の医師が看護師とともに柔道場へ

医師からの聞き取りで「重症例は既に搬送済み」「集団生活による感染症(インフルエンザなど)、被災現場での作業による破傷風など問題となる」とのこと。

(翌日には抗インフルエンザ薬の備蓄、破傷風トキソイドの備蓄完了)

中嶋はこの山田南小学校にて、大学時代の知人(山田町出身)と再会。父親の安否が不明な状況で、薬剤師としてボランティア参加。

21日

山田町

武政先生は岩手県薬剤師会へ向かいサポート、支援体制に関するミーティングへ向かう。

私たちは8:00AM 到着を目指して山田南小学校へ向け出発。

遠野市近くの「道の駅 風の丘」にて、静岡日赤病院チームの薬剤師、木村さんに声をかける。

日赤では釜石の仮設診療所を設営。診療所での診察と避難所の巡回診療を行



っている。巡回診療の場合には処方せんを発行している。

お互い連絡先を交換しました。

到着後、薬局ミーティングに参加。

そこで、「作業効率をあげるため。」「被災者のためにできること。」について提案。

作業効率をあげるため

- 律速段階は薬袋作成

「本人に名前の記入をお願いできないか?」「被災者からボランティアを募集し名前の記入だけでもお願いできないか?」「薬袋はほんとに必要か?」などを提案。

動作をスムーズにするため、パイプイスから、丸イスへ変更

- 被災者のためにできること

地元薬剤師には、投薬業務（被災者と接するところ）に加わってほしいと要請したが、すぐに、診療所内の調剤所へ戻ってくる。適応能力に大きな差が出ている。

前日の炊き出しの残りのせんべい汁を、持参したガスコンロで温めおいしくいただいた。

私たち派遣隊の装備に感心された。

私たちは青色のジャンパーを着用していたこと、青森からの派遣との意味から「青い人たち」と呼ばれるようになった。

午後は、中嶋、早川チームは小学校へ残り、藤田、坂本チームは20日に笛吹峠で気になった地区を訪問。

- 釜石市栗林地区

20日同様、消防団前には人が集まっている。聞いてみると、燃料がないため移動も出来ず、町に行ってもお店がないため購入もできない。避難所生活をしている被災者とは異なるが生活に困っている。

この消防団では、地域住民のための食事、物資の保管などを行っていた。

22日からの大船渡支援があるため夕方に釜石へ戻ることになった。

宿の手配は、武政先生にお願いし確保できた。

(釜石市の中田薬局に紹介していただき無事24日まで及川旅館に宿泊。)

22～23日

大船渡へ向かう。事前の情報で国道45号は使用できないと言われていたため、住田町経由で向かうことにした。

気仙中央薬局到着後、気仙地区（大船渡市、陸前高田市、住田町）の被害状況、医療機関の状況などについて説明を受ける。

1：処方せん調剤に謀殺される薬局

被災を逃れ、機能している県立大船渡病院、菊池医院へ他医療機関から流れてくる。

そのため、薬局業務は通常よりハードなものとなり、

気仙地区の薬剤師もボランティアで数名加わり気仙中央薬局で業務を行っている。

また、中嶋と坂本、二人で窓口業務を担当した。「なぜ、地元のスタッフが窓口業務をしてくれないのか??」と思いながら1日終了。



● 薬局へ被災者が殺到するのはなぜか？

機能している病院、薬局が少ない

↓

機能している薬局へ処方せんが集中するため

↓

病院へ行く必要があるのか？

↓

薬剤師が避難所へ行きトリアージ

↓

軽症例はOTC薬などで対応

● 薬局が忙しくなるのはなぜか？

前回と同じように処方できることは理想

↓

薬剤師が受診前に被災者の服用薬の聞き取り、チェック

↓

被災者、患者さんの同意の上、くすりの制限をお願い

↓
処方せん発行

2：衛生的な薬局の維持

私たちは、窓口業務を担当したことで気がついたこと。

それは、被災者の方の靴のよごれ。

薬局がみるみる汚れ、さらに、待ち時間が長くなっているため、靴のよごれに起因する感染症にも注意が必要である。ピューラックス（次亜塩素酸ナトリウム）の使用方法を薬局職員へ説明。1日数回、床へ散布する事を提案。

そもそも、私たちは被災者支援であり、薬局支援ではないため、23日午前で気仙地区のサポートは終了。釜石経由、花巻市東和町へ戻る事にした。

24、25日（午前）は山田南小学校をサポートすることを、山田南小学校薬剤師、高橋さんへ連絡。大変よろこばれた。

喜ばれることをして、その対価を手にするのが、薬局薬剤師の使命ではないでしょうか???

22日夜に、釜石市内の仮設診療所に参加している静岡日赤薬剤部木村さんより連絡を受けた。保険薬局業務について2点確認したいことがあるとの事。

Q1：14日分で処方しているが日数は適当か？

Q2：疑義照会は1件もないが大丈夫なのか？

武政先生に釜石薬剤師会の中田さんへの対応をお願いした。

24日

山田南小学校到着

午前中は、中嶋、坂本は薬局での業務をサポート。国立病院機構のスタッフはほぼ入れ替わっている。

宮古市の薬剤師高橋さんはお休み。代わりに山田町の薬剤師竹内さんがリーダー。

国立病院機構は、3チームで山田南小学校をフォローしている。名古屋医療



センター、東名古屋病院、長良医療センター。

岩手の被災地で、岐阜県下呂市出身の坂本は、地元の医療スタッフと出会えた事はうれしく心強く思えた。

午後は学校での業務も少ないため、避難所周りの許可をいただき、途中、前夜の食事の残りを被災した海辺のローソン駐車場でいただいた。砂埃の中おいしく完食。

24日には、避難所2カ所を訪問

- 山田町船越地区第7、8地割。「鯨と海の科学館」近くの個人宅の避難所を訪問

学校、集会所での避難生活より、近所のみんなでの避難生活を選んだ。物資は町、自衛隊が運んでいるようである。

こちらは、湧き水があり、プロパンガスを使用しているので食事、洗濯は出来ている。また、外の小屋には、手作りのお風呂も出来上がっている。



目がかゆい、のどの調子が悪い、腰が痛いなどの訴えがあった。 山田町船越地区

持参した点眼、うがい薬、湿布をお渡しした。

目の違和感、のどの違和感の原因は、被災による埃が原因と考えられるが、この地区ではそれだけではない。

この山田町船越地区第7、8地割は、今回の被災により出た、鉄クズ、木材などの集積場となっていることも症状を悪化させる原因と思われる。

- 大槌町浪板地区、浪板交流促進センターを訪問

大槌地区は初めての支援。こちらは津波による被災者の避難所でもあるが、家が津波、地震の被害にあっていない（家の倒壊はない）近隣住民への支援を行っている。（物資の配給ポイント）

私たちが到着した時に、近隣住民への物資の配給が行われるところで、自治会長へ「目薬、うがい薬があるので、必要な人へ配布したい」ことを伝えたと快諾。

やはり、こちらでも目が赤い、目がかゆい、ごろごろする、のどの調子が悪いなどの声は聞かれた。近隣住民の方に喜んでもらえたと思う。

しかし、物資の配給中に問題発生！

自治会長が家族の人数を聞き、人数に応じてお米を10kg、5kg、3kgと分けて配布していたが、残り10家族程度のところでお米がなくなる。

自治会長は事情を説明しているが近隣住民は納得しない。同じ光景は海外の難民キャンプでも見た事のある光景。みんなが協力しなくてはいけない時期に大問題。

当社より物資として持ち込んでいたお米の提供を自治会長に申し入れ、無事、近隣住民の皆さんも納得して帰宅された。自治会長にも大変よろこばれた。

25日

最終日。午前中のみ山田南小学校にてサポート。

11AM：弘前へ向けて出発

17：30PM：弘前到着





早川洋輔 中嶋優太 坂本賢 藤田雄太 武政文彦氏
現地サポーター

結語

今回、被災1週間後に現地入りし約1週間支援活動を行った。
2002年アフガン難民キャンプでは、「言葉の壁」がコミュニケーションの障害となっていたが、今回の東日本大震災では、喜び、悲しみの声、すべてを理解できた。

いまだに「言葉を理解できたことがよかったのか？」疑問は残る。

ただ、願う事は一日も早い復興。そして被災地のために、出来る事を継続する事。継続することにより、必ず良い未来があると信じている。

「最大の敵は無関心」

謝辞

本報告書は、東日本大震災第一次派遣隊の活動をまとめたものです。この支援活動は、弘前記念病院様、龍亭グループ、境関温泉、きずなの会の皆様、(株)町田アンド町田商会の皆様、当社募金箱へご寄付いただいた皆様によって遂行することができました。ここに支援者の皆様に感謝いたします。

また、この活動に終始、ご指導、ご助言を戴いた弊社代表取締役 町田容造、東和薬局 武政文彦氏に深く感謝いたします。

今後も、微力ではありますが「効果的な支援」を実行したいと考えています。
今後ともご支援をよろしくお願いします。

坂本 賢

現地サポーター 武政文彦氏 略歴

東和薬局（岩手県）開設者薬剤師

1954年生まれ。

大学卒業後、水野薬局（東京都文京区）に7年間勤務後、帰郷

2002年 アフガン難民対策薬剤師団第一次派遣調査隊参加

2004年 アフガン難民対策薬剤師団第二次派遣調査隊後方支援

2006年 バングラデシュ交流調査薬剤師団参加

㈱町田アンド町田商会 代表取締役 町田容造氏 略歴

1948年生まれ。

1970年 昭和大学薬学部卒業

1973年 青森県板柳町にサカエ薬局本店 開設

1979年 株式会社町田 設立 代表取締役就任

1989年 株式会社町田商会 代表取締役就任

2000年 株式会社町田・株式会社町田商会合併により、
株式会社町田アンド町田商会 代表取締役就任
(現在県内26薬局、岩手県2薬局)

2002年 2月 アフガン難民対策薬剤師団第一次派遣調査隊参加

2005年 7月 タイ国予備調査隊参加
(国際ロータリークラブ第2830地区 アジア親善大使)

2004年 5月 アフガン難民対策薬剤師団第二次派遣調査隊参加

2004年 8月 ネパール訪問
(国際ロータリークラブ第2830地区 アジア親善大使)

2006年 4月 バングラデシュ交流調査薬剤師団参加

添付：支援物資リスト、行動記録

災害支援チーム 行動記録

日付	時刻	日程		
		坂本・中嶋 組	早川・藤田 組	
2011年3月19日	12:40	弘前 発		
	16:45	東和薬局 着。今後の日程に関するミーティング		
	19:00	東和町にて夕食(武政夫妻同伴)		
	21:30	ホテルルートイン花巻 チェックイン		
2011年3月20日	8:00	ホテルルートイン花巻 チェックアウト。東和薬局 集合、武政一家と合流		
	9:00	東和薬局 発		
	11:40	道の駅やまだ 訪問		
	11:50	山田町織笠地区 訪問 (織笠小学校、織笠コミュニティセンター)		
	13:00	昼食(道の駅やまだにて)		
	14:00	山田町立山田南小学校 着	薬局業務	撮影、血圧計設置
	15:50	山田南小 発		
	17:50	中田薬局小佐野店(釜石市)にて情報交換と物資配付		
	19:00	夕食(遠野市にて)		
	21:00	武政先生宅に宿泊		
2011年3月21日	6:00	東和薬局 発		
	8:00	山田南小 着	薬局業務	↑ 撮影、被災者とお話、介護福祉(早川) 道の駅やまだへ物資供給(藤田) 釜石栗林町地区の消防団へ物資供給 (坂本・藤田) ↓
	11:15			
	13:50			
	16:10	山田南小 発		
20:00	釜石市 及川旅館 着			
2011年3月22日	7:30	及川旅館 発		
	9:40	大船渡市気仙地区 着。金野先生とミーティング		
	11:50	↑ 大船渡市内 避難所の状況確認 大船渡市立盛小学校 訪問 昼食後、盛小学校にてボランティア活動 (仮設風呂利用者へタオル配付、 待合室までの誘導) ↓	気仙地区にて薬局業務	
	12:50			
	17:00		盛小学校 発	
	19:30	気仙地区 発		
21:30	釜石市 及川旅館 着			
2011年3月23日	7:40	及川旅館 発		
	8:50	気仙中央薬局 着	↑ 避難所搜索、薬品名の聞き取り調査 リアスホール 訪問、聞き取り調査 リアスホール 発 大船渡北小学校 訪問、聞き取り調査 ↓	
	9:35	気仙地区の薬局にて薬局業務		
	11:30			
	11:40			
	12:20	チーム合流		
	14:30	大船渡市気仙地区 発。東和薬局を目指す		
	18:10	東和薬局 着		
	19:00	武政一家と夕食		
	21:30	武政先生宅に宿泊		
2011年3月24日	7:10	東和薬局 発、山田南小学校を目指す		
	9:45	山田南小学校 着	↑ 撮影、避難所搜索 山田町立豊間根中学校、宮古市高浜地区 ↓	
	11:00	薬局業務		
	12:00	昼食		
	14:00	山田町船越地区、同町波板交流センター		
	16:00	山田南小にて活動(1時間ほど滞在)		
	17:30	中田薬局 訪問		
	18:00	及川旅館 着、宿泊		
2011年3月25日	8:00	及川旅館 発		
	9:10	山田南小学校 着	↑ 小学校とその近辺を撮影 ↓	
	11:15	山田南小学校 発		
	11:30	山田町船越地区 訪問。医薬品の提供と状況確認		
	13:10	昼食		
	14:30	東和薬局 着。武政先生と報告書作成に関するミーティング		
	15:30	東和薬局 発		
17:30	町田アンド町田商会 本部 着			

コミュニティ別納品物一覧

品名 コミュニティ	道の駅や まだ	織笠小学 校	織笠コミュ ニティセン ター	中田薬局	釜石市栗 林町消防 団	山田町立 豊間根中 学校	宮古市高 浜自治会	山田町船 越	大槌町波 板交流セン ター
米5キロ	4袋								16袋
OTC		シロリサン 2箱 スルボン 12箱 ゼオスリーH 20箱							
サニサーラEGO						4箱	4箱		
イージーセプト	2箱				3箱	4箱			
イージー消毒ハンドジェル			2箱				2箱	1箱	
薬用ハンドジェル						1箱			
スコッティ					3箱	1箱	1箱		
固形せっけん					1箱				
生理用ナプキン	おむつ4箱			1箱	1箱				
清浄メン						1箱			
漂白剤(キッチンブリーチ)					2本				
ピューラックス					5本				
マスクN95 S				1箱					
マスクN95 M				1箱		1箱			
不織布マスク				1箱	1箱	1箱	1箱		
歯ブラシ	50本				100本			30本	120本
歯磨き粉	40本					60本		10本	30本
粉ミルク	2缶				30缶				
バランスパワー					2箱				
髭剃り					1箱				1箱
エコバック					1箱	1箱			
目薬								30個	50個
イソジン								2箱	
ラビネット						1箱			
ガスボンベ							12本		
湿布								複数枚	
毛布			20枚以上						